

資料紹介 1 照臨寺所蔵「紙本墨書六字名号」「紙本墨書九字名号」

はじめに

鯖江市内で指定あるいは登録されている文化財は平成 28 年 11 月 29 日をもって 200 件となり、平成 10 年度に発刊した鯖江市文化財図録編集委員会編『鯖江の文化財』で紹介した鯖江市内の指定・登録文化財 67 件の 3 倍近い件数となった。

こうした文化財指定件数の増加は、鯖江市域の歴史を後世へ伝え、市民の郷土への誇りと愛着を醸成させることを目的に、集中的に文化財調査が行われた結果である。今後は、これらの文化財のより一層の保護と活用を図り、調査結果を市民に還元していくことが必要とされる。よって、本紙では企画展「祭りと祈りの原風景」でも展示した 2 件の平成 27 年度鯖江市指定文化財を紹介する。

1. 紙本墨書六字名号 1 帖 (8 面)

指 定 《市指定》平成 28 年 3 月 31 日
所在地 鯖江市和田町
所有者 真宗大谷派宝瓶山照臨寺
時 代 室町時代
形 状 紙本墨書 (一部彩色)

法 量 名号：4.6×21.2 (cm)

全体：3m24.5×38.0 (cm)

1 面：64.9×38.0 (cm)

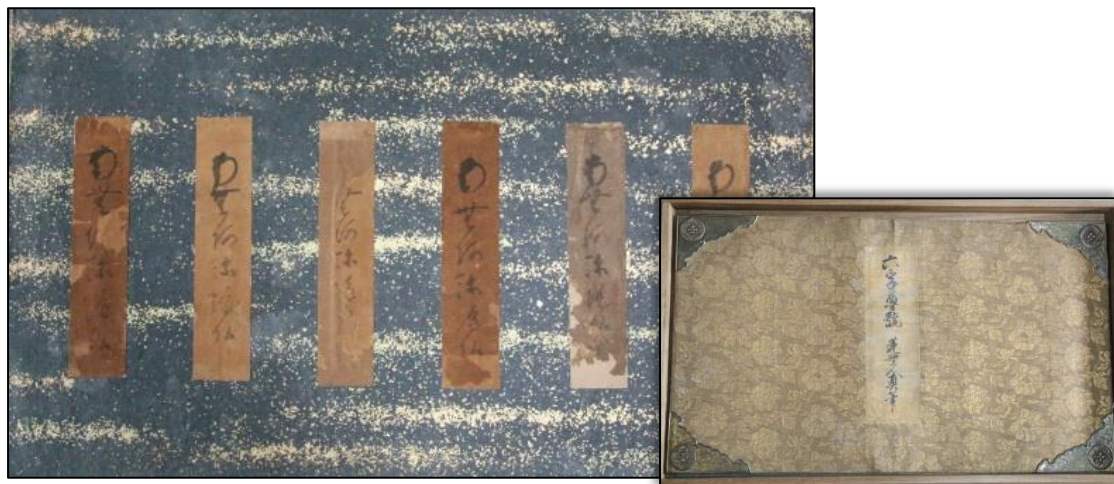
50 点の名号のうち、4 点はその大半を欠損しているが全体的にはおおむね良好。但し、本紙前面にカビによる汚損あり。

【所見】

表紙は見返しには宝相華の金襴装、四隅の隅金にそれぞれ八藤紋を配して装飾される。見返しには宝相華唐草文様の金襴装を配し、紺料紙には金銀の砂子を撒くという豪華な装飾が施されている。各名号の料紙はすべて異なるものが用いられている。

本願寺 8 世蓮如は、「南無阿弥陀仏」の六字名号を下附し、浄土真宗の教線の拡大と布教によって、爆発的に信者を増加させたことで知られており、浄土真宗寺院には蓮如への帰依をきっかけに転宗したと伝える道場や寺が数多くある。蓮如の名号は実に多様だが、形態的に縦 35cm 以上の料紙に書かれたものが多く、本件のような小型の形態の名号は、俗に「数の名号」と呼ばれている (なお、照臨寺では、本名号を「六字尊号」と称す)。

この「数の名号」とは蓮如の末子実従所縁



の順興寺(枚方坊・現京都市)に大量に伝来したものである。従来、かかる「数の名号」は、昭和5年に三浦周行氏(当時京都帝国大学教授)によって蓮如真筆と鑑定されて以来、蓮如筆とされてきた。特に、本件「六字尊号」にも『順興寺所傳蓮如上人真筆數の名號に就いて』(昭和7年)^①と題する数丁の冊子が付属する。これによると、かつて順興寺には5000枚が伝わっていたが、宝暦3年(1753)に順興寺宝殿門再建の資金調達のため、抵当として寺から出されたという。これが昭和初年頃にその一部分が旧家にて発見され、山本善之助氏のもとへ渡り、彼が組織した「蓮如上人真筆數の名号頒布会」によって、関係各所をはじめ希望者へ頒布するという経緯が記されている。これによると、50枚ずつを金欄の帖に仕立て、西本願寺・東本願寺・順興寺・龍谷大学・大谷大学・京都帝国大学へ各一帖ずつ、そして10枚の名号を一幅に仕立てたものを恩賜京都博物館(現京都国立博物館)へ寄贈し、その礼状の写しも巻末に綴じられている。よって照臨寺蔵「六字尊号」もまた、50枚を一帖に仕立てたものであることも踏まえ、かつて順興寺所伝の「数の名号」の一つかと思われた。

しかし、大谷大学博物館に収蔵される「数の名号」を比較した結果、料紙法量は近いものの、大谷大学本とは筆跡は異なるものであり、先述した「蓮如上人真筆數の名号頒布会」から頒布されたものとは全く異なるものという見方が強まった。また、近年、大谷大学本をはじめとする「数の名号」は、妙寿寺(豊後高田市)蔵「証如筆六字名号」に近いという鑑定結果が出ており、伝承が事実と一致しない可能性が指摘されている。よって、中世真宗史研究の分野ではこの見解を妥当とし、三浦氏の鑑定が克服されている。

ところが、照臨寺蔵「六字尊号」は、証如筆とされるそれとも筆跡が異なり、料紙も独特で、「蓮如上人真筆數の名号頒布会」のそれよりも格段に豪華装である。『順興寺所傳蓮如上人真筆數の名號に就いて』が付属しているが、題箋に「順興寺」とも記されていないので、分けて別物と考えたほうがよいと思われた。さらに、本件の名号の筆跡は蓮如の草書名号に近く、真筆である可能性が高い。

よって、照臨寺蔵「六字尊号」は伝承のとおりに、蓮如真筆の小形の名号(数の名号)群といえ、同寺への伝来の経緯はいまだ不明な点が多いものの、従来、蓮如真筆と推断できる事例が管見の限りなかったことからすると、極めて重要な資料といえる。

2. 紙本墨書九字名号 1幅



指 定 《市指定》平成 28 年 3 月 31 日
所在地 鯖江市和田町
所有者 真宗大谷派宝瓶山照臨寺
時 代 室町時代
形 状 紙本墨書（一部彩色）
法 量 本紙：31.0×86.0（cm）
全体：47.0×1m71.5（cm）

本紙は「南」字より上部、下部蓮台の両脇は、伝世過程で数度の修復が加わるなかで後補紙による本紙裏打が施されている。名号ならびに下部蓮台彩色箇所は、ほぼ当初の紙が残留する。

【所見】

浄土真宗では諸国の寺院に方便法身尊像などの絵像をはじめ、六字名号（「南無阿弥陀仏」）・十字名号（「帰命盡十方無碍光如来」）・九字名号（「南無不可思議光如来」）などが門主より下附されている。数的にみれば六字名号の現存数は多いが、九字名号、十字名号の現存数は限られている。

照臨寺の寺伝では、仰明寺が寛正五年（1464）に蓮如に帰依して真言寺院から浄土真宗へ転宗し、文明年間に御染筆の名号を賜ったとされており、時代的に当九字名号がこれにあたりとみられている。その後、貞享元年（1684）に仰明寺から門徒 50 軒と持山一箇所を譲り受け「照臨寺」が成立しており、同名号もこの時以来、照臨寺へと移り、今日に至っているものと思われる。数度の修復痕は、同寺院にとって、木仏下附後も本尊と同様に寺宝として重視されたことを物語っている。

蓮台は丁寧に描かれており、金泥にて繊細な線が引かれている。門主から名号を下附される用意を整えている。

本件は、愛知県半田市の雲観寺の「九字名

号」が蓮如筆として半田市の指定を受けているものと酷似しており、蓮如真筆である可能性がないとはいえないものの、筆跡の特徴から見て本願寺 9 世実如筆の可能性が高い。特に「无」、「来」にあらわれる特徴によって、同朋大学仏教文化研究所編『蓮如名号の研究』（宝蔵館、平成 10 年）において分類される「楷書体九字名号タイプい」の実如真筆と考えられているものに似ていることがわかる。

浄土真宗名号の研究分野では、寛正の法難以降、蓮如が書き与えた墨書の十字・九字名号は少なく、墨書の六字名号が圧倒的に多く書かれており、その後、実如の頃に墨書や金泥の十字・九字名号の下附が復活してきた傾向が確認されている。

以上のことから、照臨寺蔵の「九字名号」は、筆跡と名号下附の研究による状況などから、蓮如筆とは認め難く、実如上人筆「九字名号」とみられるものの、当該期における浄土真宗の稀少な十字・九字名号の現存例の一つとして貴重といえる。

- ① 本件の参考に『順興寺所傳蓮如上人真筆數の名號に就いて』の全文を付す。

蓮如上人御眞筆數の名號頒布の趣意

眞宗中興の祖、蓮如上人は御自身で自分程六字名號を多く書いた者は恐らくなからうと仰せられたと言います。

また事實に於て、道場用の大幅の御名號から毎戸に安置する小幅の御名號まで、色々立派な六字名號が澤山世上に傳はつて居ます。

蓮如上人の末男、實從上人の住はれた南殿順興寺には小形の御名號五千枚が傳はり、古來蓮如上人の筆數の名號として一部の人々に知られて居ました。

この貴重な御名號は一時行方不明でありましたが、最近に至り今日までその一部分が當地の舊家に大切に保存されて居たことが分り、この順興寺御舊藏の蓮如上人御染筆數の名號を、今回事情あって私方へ譲り受けることになりました。

さて、かゝる尊い御名號を保管いたしますには、何か適當な方法はないかと、いろへの御方にお尋ね申しましたところ、この際一部分を御本山並に順興寺其他各關係方面に献納し、一部分を一般の希望者に分譲する様に勧められたのであります。

先年、京都帝國大學名譽教授文學博士三浦周行先生に、尚一應御鑑定を仰ぎましたところ、上掲の如き御鑑定書を戴きました。

而してこの順興寺に秘藏されて居た數の名號は、寶曆三年、今から百八十餘年前に、寶殿門再建の資金を調達する爲低當として寺から出され、遂にその儘寺へ戻らなかつたのであります。

借用證文の全文は第四頁及第五頁の寫眞の通りでありまして、低當になつた御名號は「當殿什寶之内六字尊號五千枚唐櫃入二箇」とあつて、借りた金額は丁銀三百五十貫目であります。

これは元文の丁銀即眞文丁銀でありまして、當時は金一兩に對し丁銀六十匁、米一石一斗四升ばかりになるので、これを換算すると、

金五八百三十三兩餘

米六千六百五十石餘（二萬六千六百二十四俵）

となるから、御名號一幅は玄米三俵と二斗五升ばかりになるのであります。相當高價に計算されることは、この御名號の重んぜられて居たことを示して居ます。

銀主の家原治兵衛は當時で、寺院又神社等の造營には出来だけ金子を融通したと言ふことでありますから、順興寺でも金子の入用に迫られて、この人の義侠心に訴へたのであらうと思われれます。

蓮如上人が非常に多數の御名號をお書きになられた事實は、上人の御弟子の法專房空善の手記に、「われ程名號書きたる人は日本にあるまじきぞ」と、常隨の慶聞房龍玄に仰せられたとあり、又實悟の『本願寺作法の次第』には、「蓮如

の御時は二十五日御齋前に名號を三百幅まで遊ばされ候」と、古記に出て居ることに依つても知ることが出来ます。

これらに就いては、京都龍谷大學教授禿氏祐祥先生が詳細に御研究下さいまして、『順興寺所傳蓮如上人の筆數の名號の由來』と題する、丁寧な説明書を作して下さいました。

この度この貴重なる御名號を私方に譲り受けまして、この澤山の御名號を分散させることは、惜しいとお考へになる御方もあるでせうが、若しや天災でも起つてこれを一朝にして消失する様なことがあつては、尚更取り返しのつかぬ事を考へ、且つ色々と權威あるお方のお勧めに依りまして、一般御希望の方に成る可く些少の御冥加金にて分譲し、弘くお祈りして戴くことが最も適當な處置であらうと考えましたので、一部分は永く後世に傳ふる爲め左記七ヶ所に寄贈いたし、其の他は規定を設けて一般のお方にお頒ちすることにいたしました。

而して御名號各五十枚宛を金襴の帖に仕立て、西本願寺、東本願寺、順興寺、龍谷大學、大谷大學、京都帝國大學へ各一帖宛、恩賜京都博物館へは十枚を一幅に仕立てたものを寄贈いたし、それ後掲寫眞の如き、鄭重なる禮状を頂きました。就中御本山には、永久に什寶として御收藏下さることとなり、この貴重なる御名號を一般のお方にもお頒ち出来ますことは、私方でもこの上もなき喜びと致す次第でございます。

さて、この御名號は縦六寸五分ばかりの斐紙に行書體で書かれ、一見五百年前の古色を認め得ない程完全に保存せられ、今日までかくも所傳の明かな尊い御名號の現存せることは稀有なことでありまして、實に蓮如上人の御高德の然らしむる所と存じます。

既に當地に於きまして、多數の希望者にお頒ちいたしましたので、この機会を逸しては、今後再び求め得られることの出来ないことと思はれます。

御名號は佛壇の大きさ等考へて、適當に表装することも出来ますし、又三つ折に表装すれば旅行等に携帯することも出来ます。

尚御名號一枚毎に、常樂臺今小路覺尊師直筆の鑑定状と、前京都帝國大學名譽教授文學博士三浦周行先生、並に龍谷大學教授禿氏祐祥先生の丁寧にお作り下さいました説明書『數の名號由來』一部をお添へいたします。

御希望の方は左記頒布規定に基き御申込み次第御送附いたします。